

## メープルレター(96)

### 親も子も猫もバカンス

梅雨のように雨が続き、その合間に猛暑がやってくる予定のつかない夏になりました。こちらでは、6月下旬のケベック州祝日、7月1日のカナダデイ祝日頃から夏のバカンスムードになっていきます。オールドモントリオールには観光客が溢れ、朝方まで引きを切りません。週一度夜空に華やかな花火がうちあげられ、子供も大人も若者も首が痛くなるまで空を見上げて美しい演出を楽しんでいます。花火は、空に打ち上げられるものだけでなく、下の方に音楽に合わせて動く花火もあり、見ごたえがあります。存分に楽しめるように、花火見物客用に橋が一つ、この時は、車が通行止めにもなります。橋は、見物客で真っ黒に埋まります。カジノ行きの通りからも良く見え、ゆっくり走る車で埋まります。止まってはいけないので、まるで亀のようにのろのろと進みます。その後、カジノでひと遊びするのかもしれません。

そんなある日、我が家にやって来た、猫のモモ（本当はモーリス。長いのでモモ）。義理の次男の猫シッターをすることになりました。ケベックの大学で教える次男はフランスのボルドー大学との共同研究の為、学生や他の教授たちと旅立ちました。その後家族が合流し、リモージュの嫁の実家に寄ったり、親戚の行事に出たりしながらフランスで2－3週間バカンスを過ごすことになっています。その後は、また他に旅立つのですが。。。この人のバカンス計画は、いつも何とも複雑で面倒です。他の人は、ジグソーパにはめ込まれるように、役割を割り当てられ振り回されます。

「猫をしばらく預かってくれる？必要な物は全部持っていくから。それと、次いでにお昼ご飯も食べさせてくれる？」

早朝にレンタカーでケベックから猫を連れて3時間かけてやってきました。

「人懐っこい猫だよ。昼間はドライフーズで夜は小さな缶詰をひとつでいいんだ。食べ物には余り興味のない猫だからそれで大満足。」

久しぶりに頑張って作った和食をつまみながら、当節の研究事情を話していました。その2-3日前に研究についてど田舎の山の中でとったユーチューブが出たばかりでした。アメリカ（特にハーバード大学）の研究仲間は、トランプのせいで、研究がほぼできなくなり、職替えを考えているとも言っていました。

「職替えって、他の大学とか研究所？」

「いや、どこも同じ。仕事も研究もカット。しばらくアマゾンの配達をしようかなあって言っている友達もいるよ。アメリカは世界中からの有名な研究者が充実した研究ができる所だったんだ。アメリカは夢を捨てたんだよ。」

そういうながら、とっておきの明太子を美味しそうに食べていました。実家の母親の庭仕事を手伝った後、夜の便でボルドーに旅立っていました。猫のモモは、次男の言葉とは裏腹に何でも食べ、カウンターに飛びのりグルメ三昧をするようになり、トトロの体型に近づき始めています。次男に怒られそう。。。

フランスの旅の後、次男は一旦モントリオールに降りたち、娘を実家の母親に預け、カリブ海のマルチニク島に旅立ちます。嫁はマルチニクの職場で仕事をし、次男は美しい海（？）（浜辺は海藻に埋め尽くされ悪夢のようだそうですが）を眺めながら研究の記事を書くことになっています。次男の息子はそのままフランスに残り、母方の祖父母たちとブルゴーニュを訪ねたりしながらバカンスを過し一人で帰国することでした。

「僕の親からの息抜きのバカンス。。」

孫はそんな事を言っていたような気がします。それにしても、猫のモモはいつ引き取りにくるのでしょうか。

さてさて、先日義理の長男の息子の14歳の誕生日を韓国料理でしました。久々に会う長男の子供たち。恋人に会うようなうれしさです。孫娘とは遠くからお互いに駆け寄っ

てしまうほどでした。180センチはあろうかと思うほど大きな14歳の孫息子はきらきらと輝くようでした。何なんだろうこのオーラは？

「14歳になったその日からアルバイトを始めたんだ。スーパーの野菜や果物のセクションなんだ。トラックで着いた食品を冷蔵室に運んで、そこから店の売り場に並べるんだ。冷蔵室たってものすごい大きさだよ。冷却の風がビューンビューン吹いているんだ。」

「アラーそんなに大きいの。」

「そうだよ。中は寒いから、特別のジャンパーと長靴を買っただ。いいかい、おばあちゃん、売り場の野菜や果物は真ん中から下に置いてあるのを買うんだよ。残っていた古いのは一番上に乗せるから。」

「ありがとうアドバイス。そうするわ。」

「できるだけ働くと思って。楽しいんだ。」

「なんだ、この子にはこれがバカスなんだ。」

「もらったお金はどうするの。」

「それなんだよ。60%は貯金するんだ。いつか車買うんだ。30%は好きな物を買って、10%はその日の飲み物や食べ物にあてるんだ。」

孫の顔は話ながら輝いていました。

「すごい、計画的。勉強になる。ちゃんと考えて計算して使っているんだね。」

長男は、嬉しそうに自分の息子の話をききながら、

「食べ物のお金はパパがあげるから。。」

「いらないよ。自分で払うから。」

誇り高そうにそう断っていました。14歳の彼が車を買える年になるのは何年も先のことです。でも夢なんだ、この子の。

「それにね、ライフサーバーのコースもとっているんだ。もう一つ来年コースをとると資格がとれるんだ。そうしたら、きちんとプールの監視員になれるから、お給料もずっとよくなるし。」

「そうなんだ。素晴らしい。資格はたくさん持っていた方が良いわよ。」

父親に怒られ隅っこに小さくなっているだけだったこの子がいつの間にか、自分のしたいことを見つけて歩き出すようになったのです。自信がついてきたのでしょうか。しっかりした子になりました。何があっても生き抜いていかれるのではないでしようか。

「そうそう、おばあちゃん、僕にお寿司と卵焼きをたべさせてね。忘れないでね。」

そうか、この子は玄関先でいつもお寿司と卵焼きを待っていたんだった。それにも、子供達は良く食べていました。山のようなお肉を平らげ、麺類をたべ、サラダを食べ、チジミを食べ、お通しも食べ、あれよあれよとお皿を空にしていきます。大きくなるはずです。

こうして年の後半が始まっていきました。